

母親集団活動とネットワークに関する一考察
 東京家政学院大家政 鈴木百合子

目的 今日の家庭や地域社会の変化は、子育てにさまざまな影響を及ぼし、解決しなければならぬ課題が多々存在する。中でも「かかわり」の縮小は、家庭や地域社会において人間関係の縮小、弱体化を生み、子育てに携わる母親の孤立化を招く。子育ては家族や近隣社会の人々の協力、連携があって成し得るのである。そこで、どのような方法によって今日の子育ての現状を打開し、子育てをめぐって人々が協力、連携し、ネットワークづくりをしていけるか、その可能性を実践例より明らかにする。

方法 本学児童学研究室で実施している母親集団活動(母子集団活動)の実践結果(1991年度)より心理劇、創作劇、ペープサートによる劇活動を中心に考察する。

結果 I 心理劇(的)活動(前半後半合同活動) 実際に直接的にわが子、他の子、母親、指導者たちと役割を取ってふるまう体験は最初とまどい、堅さなどがあるがそのときどきの状況で新しいふるまい方の可能性を見つけ子どもとの出会い方、人との共存のし方が形成される。II 創作劇活動(七夕行事) 劇の内容を相談する過程で子どもの発達、季節、子どもの参加のし方(観客・演者)等、子ども集団とのかかわりを意識化して創作する。母親間のコミュニケーションが活発化し母親集団としてのまとまりが顕著になる。III ペープサートによる劇活動(クリスマス行事) ペープサートづくりを家庭で父親、きょうだいも分担する。活動時間後も母親達が自主的に子ども達を保育する役割、製作を担当する役割を取り合って劇活動の準備をする。家族、集団活動のメンバーの協力、連携が見られ子育てのネットワークが拡大する。 研究協力者(吉川 中野 島田)